

事件名 強制性交等被疑事件
被疑者 ○○

意見書

令和○年○月○日

福岡地方検察庁 検察官 ○○○○ 殿

弁護士 福岡 九州男

上記被疑者に対する頭書事件について、その処分に関して、以下のとおり意見を述べる。

第1 はじめに

被疑者についての本件被疑事実については、以下述べるとおり、その嫌疑がなく、あるいは嫌疑不十分であって、家庭裁判所に送致すべきでない。

第2 性行為についての被害者の真意に基づく承諾があったこと

1 真意の承諾の意義

強制性交等の非行が認められるためには、被害者の真意に基づく承諾がなかったと認められることが必要である。なお、真意の承諾といえるためには、被害者に、被疑者との性交を積極的に期待又は希望する事情までは必要ではなく、被害者の任意な判断として被疑者から求められれば抵抗するつもりもないし、性交しても仕方がないという容認の意思があればよい(小林充・植村立郎「刑事事実認定重要判決 50 選(上)」231 頁)。

2 被疑者と被害者との元々の人的関係

本件の場合、被疑者と被害者とはお互いに出会いを求めて出会い系アプリを

通じて知り合い、約 2 週間 SNS で連絡を毎日取り続けた上で会う約束をするに至っていることは、SNS のデータその他で客観的に明らかなはずである。

つまり、被疑者と被害者とは実際に会うのは初めてではあったものの、すでにかかなりの頻度で SNS でのやりとりをし、会いたいと思う程度に相手についていい印象を持っている状態にあった。

3 深夜に被疑者自宅に来ていること

そして、令和〇年〇月〇日の午後 8 時ころから被疑者と被害者は実際に会い、飲食店で食事をした後、午後 11 時ころに被害者も了承する形で被疑者宅に赴いている。

被害者が自宅に行くこと自体は了承していたことは、途中で立ち寄ったコンビニエンスストアの防犯カメラ映像などからも明らかであると思われる。

深夜に相手男性の自宅に行くということ自体、相手男性に一定の好意を持っていたことの表れである。

4 性行為に至るまでの状況

被疑者の自宅における性行為に至るまでの状況としても、被疑者はいきなり性行為に及んだわけではなく、キスをしたり、胸を愛撫したり、陰部を触ったりしたが、被害者がこれを明確に拒絶する様子もなかった。後述するとおり、被疑者は被害者が明確に拒絶する反応を示してからは、すぐに性行為をやめており、仮に途中で被害者が明確な拒絶の反応を示していれば、それ以上の行為に及ぶことは止めていたはずである。

かかる状況からすれば、被害者の真意としては当日に性行為にまで及ぶことは希望していなかったのだとしても、羞恥の気持ちや被疑者に嫌われたくないという気持ちなどから、被疑者による行為を明確に拒むことまではせず、被疑者との関係では受け入れていたと考えるべきである。

5 性行為の際の状況について

その後、被疑者が性行為にまで及ぼうとし、実際に性行為に至った際には、避妊具を装着しようとしなかったことについて疑念を抱くような素振りを見せていたものの、被害者が明確な拒絶の反応を示したのは、性行為を開始して少ししてからのものであり、その反応を見た被疑者は、その意味を分かりかねていったん性行為を続けたものの、さらに被害者が拒絶の反応を示した際に

は、無理に性行為を続けるような行動はとっていない。

かかる経緯からすれば、避妊具を装着しない形での性行為に及ぼうとする被疑者に対して不信感を抱いて気持ちが変わったと考えるのが自然であり、性行為に及ぼうとした時点では少なくとも仕方がないという容認の程度には性行為を承諾していたと考えるのが自然である。

6 暴行について

なお、本件被疑事実としては、押し倒して馬乗りになり、その両手首を右手で掴んで床に押し付けるといふ暴行があったとされているところ、それらは性交渉に通常随伴する程度の有形力の行使であるとも思われ(しかも、暗い中である程度密着した状況での被害者の被害認識であり、供述するとおりの暴行内容だったか自体に疑問がある)、かかる暴行内容自体から被害者の反抗を抑圧するような形での姦淫行為だったと即断することはできない。

7 小括

以上のとおり、少なくとも性行為に至った時点では容認という程度には性行為についての被害者の承諾はあったのであって、強制的性交等の非行は認められないことは明らかである。

第3 被害者の承諾があることの誤信

- 1 仮に被害者が真意に承諾をしていなかったとしても、被疑者は性行為に至った時点では被害者の承諾があると誤信していたのであり、強制的性交の故意が認められず、やはり強制的性交等の非行は認められない。
- 2 まず、第2項でも詳述したとおり、そもそも当時の客観的状況としても、被疑者が被害者の承諾があると誤信してもやむを得ない状況があった。

すなわち、本件の客観的状況としては、出会い系アプリで知り合って約2週間SNSでやりとりをし、一緒に食事をした後に午後11時ころという夜遅い時間帯に被疑者宅に一人で来ている。さらに、被疑者は、いきなり性行為に至ったわけではなく、手を重ねるなどのボディタッチに始まり、キスをしたり、胸を愛撫したり、陰部を触ったりするなど段階を踏んでいっているが、これらの行為に対して被害者において明確に拒絶するような言動はなかったのであり、そのような状況からすれば、性行為に関して被害者の承諾があると被疑者が誤信してもやむを得ない客観的状況があったのである。

また、被疑者は性行為に至る中で、わざわざ部屋の電気を消しているが、テレビの明かりしかないような暗い状況では、被害者の反抗を抑圧しながらの性行為は難しいはずであり、あえて電気を消したという行為からも、被疑者自身は被害者の承諾があると信じており、無理やり性行為に及ぶことは考えてはいなかったことが分かる。

このような事情からも、被疑者は真意に基づく承諾があるものと誤信していたものであり、故意が認められず、強姦性交等の非行は認められない。

第4 結論

以上のとおりであり、本件被疑事実については、①性行為自体についての被害者の真意に基づく承諾はあったし、②仮に客観的には承諾がなかったのだとしても被疑者は承諾があると誤信していたのであり、強姦性交等の非行は認められない。

したがって、被疑者については嫌疑なし又は嫌疑不十分を理由として家庭裁判所へ送致しないべきである。

以 上